

健苗育成で活着、初期生育の確保を!!

1. 出芽・育苗期間の管理

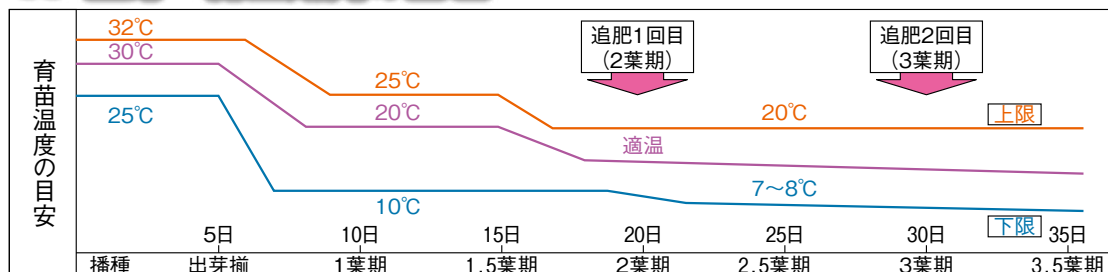
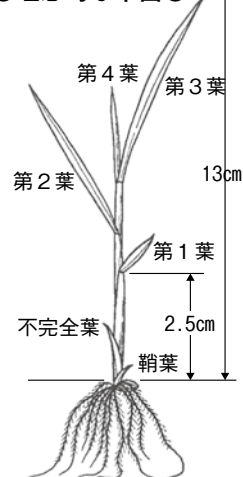


図 育苗温度の目安

●理想的な中苗●



① 温度の管理

- 出芽長は0.5cm（中苗の場合）を目標とします。出芽長を伸ばしすぎると出葉が遅れやすくなるので注意が必要です。
- 細菌病等の助長を防ぐため、出芽までの温度は32℃を超えないようにし、出芽後の再被覆は行わないでください。
- 2葉期頃までは、最高気温25℃以下、最低気温5℃以上を保ちます。2.5葉期を過ぎたら、特に寒い日でもない限りハウスを開放し徐々に外気温に慣らしてください。

② 水の管理

- かん水は早朝を基本とし、遅くとも午前中に行ってください。かん水は十分量行き、回数ができるだけ少なくしてください。

③ 育苗期の追肥

- 苗の窒素濃度は移植後の活着力に影響を与えます。本葉2葉期と3葉期にそれぞれ、窒素成分で箱あたり1g相当を施用します。追肥後は、散水して葉身に付着した肥料を洗い流し、肥料焼けを防ぎます。

	1箱あたり	100箱あたり
かん水量	500cc	50リットル
肥料	硫安	5g
	液肥2号	10cc
	500g	1リットル

※育苗ロング肥料を使用した場合は、追肥は不要です。

2. 苗立枯病の防除対策

- 床土混和や播種時に防除薬剤を使用しなかった場合は、発芽後（発病前）にタチガレエースM液剤、または発芽後から緑化期にランマンフロアブルをかん注します。
- 苗立枯病は数種あり、種類によって防除薬剤が異なるため注意してください。
- 高温性の病害であるリゾープス菌に対しては、発芽後の薬剤防除は効果が劣るので、播種後は耕種的防除（適切な温度管理）に努めてください。

3. 育苗期いもち病対策

- いもち病の発生は、育苗施設からの発病・感染苗の本田への持ち込みが主要因です。

育苗施設内および近隣の稲わら・籾殻を撤去し、育苗期防除と適切な葉いもち防除を確実に行うことで、いもち病の被害を未然に防ぐことができます。

【育苗期いもち防除】 次のいずれかで防除を行う

薬剤名	処理時期	希釈倍数・散布量
ベンレート水和剤*	播種時～播種7日後頃（かん注）	500倍 500ml/箱 1,000倍 1,000ml/箱
ビームゾル	緑化始期（かん注）	500倍 500ml/箱

※ベンレート水和剤の播種時処理は、生物農薬（タフブロックやエコホープD J）の防除効果を低下させるため、体系処理は行わない。

苗の適正管理に向けて苗代巡回を実施します。

組合員の方からの相談や管理指導のため、苗代巡回を実施します。「豊作の手始めは、まず苗づくり」からなので、きめ細やかな管理で健苗育成に努めましょう。

※各地区における集落ごとの巡回時間・集合場所については、外務で配られます資料を参照してください

開催日時

4月22日(水)	能代地区
4月23日(木)	能代地区
4月24日(金)	能代地区
4月27日(月)	二ツ井地区
4月28日(火)	二ツ井地区
4月30日(木)	二ツ井地区・藤里地区